お呼出しをうけて、裏庭のテニスコートで御相手をしました。

(四) 盆の行事

盆の十三日の夕方、各家共家族一同小ざっぱりした服装で、夫々の墓地にお迎いに行き、帰宅後家の前で麻がらを燃しました。

また十六日の夜には、藁でつくった「西方丸」という屋形船に、色々な御供物をのせ、芳島川や番匠川の住吉浜から、精霊舟として流しました。

流れ灌頂というのが行われたのも、盆の中のように記憶しています。

蟹田沖の広い川面に、二つの大きな丸い紙の山をつくり、月の出とともに火をつけるのでした。この行事を見るために、芳島川から屋形舟にのって出かけましたが、陸上から蟹田に集まる人々も沢山ありました。

(五) 青年歌舞伎

何時頃かはっきりしませんが、内町の青年達が仲町の蛭子楼の二階を稽古場にして、神明さん跡地にあった芝居小屋で、歌舞伎劇を見せました。叔父の月本八五郎の源蔵や、従兄の月本孫弥の鬘七が、いまだに目にちらつきます。

(六) 女人汀濫

浦前（漁村）の女性が町内や県外に仕事を探しておったらしく、盆と年末には浦前の娘子が、我々の商家にやって来る。半年か一年の女中奉公を、直接取引きしていました。給料は米の値段で、「何斗」できめておった様です。

また大阪方面の紡績会社の女工募集に応じて、出掛ける浦辺の女子は大変な人員で、このために大阪商船と宇和島運輸が、激しくこれら乗客の奪い合いをしておりました。

（了）

（筆者住所）藤沢市七堂南海岸七〇四四

随想

ふるさとの海

―私のお国自慢の一つ―

賛助会員　片岡　博

山裾の私の家から街なかを横切って大きな川を渡ると、道は田圃の中を真直ぐ走る一本道になる。そして、途中でトンネルをくぐり抜けて、また走り続ける。

やがて行く手に横たわる山に突き当たって、薄暗い樹間をうねるゆるやか登りがしばらく、やっと登りつめると突然前の方が開けてくる。遠くに、どこまでも続いて光る海が見おろせる峠である。

一服し終えた車は、右に左に向きを変えながらゆっくりと下っていき、やがて海辺の静かな部落にはいる。

小さな漁村の船着場の昼さがりは、のんびりとした静けさに包まれていた。

ところが、余り訪れる人もあるまいと思っていたこの漁港にも、グラスボートがあるという。美しい珊瑚礁を見せてくれるのだそうである。急に乗ってみたくなった。

ということになると、その前に先ず腹ごしらえである。早速目についた飯屋にとび込んだ。

急なら好きなように料理をしてくれるというので頼んだが、刺身と吸物、それに煮つけである。ついでに地酒のお銚子も添えて貰うことにしたのは申すまでもない。

やがて運ばれてきた料理は家庭料理そのもの。刺身はチヌ、煮物がメバルで吸物がカワハギと、それがまたまことにうまいのである。今朝獲れたばかりの魚だという。

すっかり嬉しく、良い気持になっていると、時間だとの知らせである。

舟に乗ってみてまたおどろいた。どこから現われたのか三人の先客が居たのである。結局私達と合わせて六名。釣船のような屋形船の真中に木わくが組まれていて、その底にガラスが張ってある。その下ににぶく濁って見える港の海は汚なかった。

やがて舟は岸を離れた。風もなくすばらしいお天気である。乗っているだけでも気持が良くて楽しい。

やがて入江を出ると、先ず前方の島に向かって直進。ガラスの下には青々として取りとめのない海が深々と続いている。

何かの養殖でもしているのか、丸い浮きが無数に並んで浮んでいるところを避けて、小さい島の間を走り始める頃から、次第に明るい海底が見えてきはじめた。浅くなってきたのである。

岸を離れてから三十分ぐらいか、舟は急に速度を落とした。あらためて下をのぞいてみておどろいた。ガラス一面が見事な珊瑚礁なのである。皆目水わくにかじりついた。

平べったく、様々な形に開いたようなそれはまるで海の底に咲いた大きな花のようである。舟が向きを変えて、波を透す陽の光がその上で揺れる度に、青・緑・白のその花は、夫々に変わった輝きを見せてくれるのである。

無数に魚が泳いでいる。熱帯魚のように鮮やかな原色の魚が美しい。時々大きな奴が威張ってゆっくりと通り過ぎる。

砂の上に、奇妙な形の生き物が動いていたといっては喚声が湧く。

海藻がゆっくり揺れている。

誰もが喰い入るように、ガラスの下に展開する夢のような世界に見入っている。

いつまで眺めていても飽きない、すばらしい美しさなのである。

大変なものがあるとおどろいた。

五、六年も経った今でさえ、その時の印象は鮮かに残っているほどである。

その所の名を蒲江所という。

（佐伯市出身－東京都大田区田園調布一－四六－六）

巻年記

丸市尾富尾神社の夜神楽

－大分県指定文化財
蒲江丸市尾神楽を拝観して－

会員　羽柴　弘

青みてぐら白幣帛をたぶさに枝と折り
かざしうたへば開く天岩戸（富尾社神歌）

十一月二十一日は、蒲江町丸市尾に鎮座する富尾神社の冬祭で、その前夜、県指定の蒲江神楽の奉納があると